

STONE TERRACE

設計:土井一秀建築設計事務所

風景に住む

土井一秀 | Kazuhide Doi

農地のリノベーションとしての住居

広島県北部の棚田の一部を改修して住居とする計画である。建主は代々この場所に住んでいる農家であり、このたび、若いご夫婦とお子さんのための独立した住居を建設した。棚田とは背後の森から染み出てくる水をより多くの水平面に供給する灌漑装置である。この地形はそれ自体が水と光と風を最大限に受けるための人工的なシステムとなっており、同時に自然環境と高度に調和する有機性を有している。もともと農作物のためにあったこのシステムを人間の生活を豊かにする手段に転用することで、この風景を住居とする。

石積みについて

周囲の棚田と同じ既存の石を外構、外壁、インテリアに使うことで、風景・建築、外部・内部の境界を曖昧にし、風景そのものに住む感覚をつくり出している。石はすべて敷地内にあったものを使い、新たに持ち込むことも持ち出すこともなかった。最小の材料で最大の効果を生み出すことは建築の設計において重要なテーマであるが、このように敷地内にすでに材料がある場合、できるだけ多く使った方が、その材料の搬出と廃棄を最小限にすることになり、むしろ効率的になる。結果として、大量の石の重量感と素材感がこの建築の特徴となった。

風景の発掘

住居としての単純な長方形を置くことで、農地であった既存の地形との間に、光を採り込む段状の庭、風景を水平に切り取る水盤、北から南へ上昇しながら吹き抜ける風などが発見される。それらが無機質な内部空間に複雑で豊かな表情を与え、その場の特性に応じたアクティビティが見い出される。例えば浴室は、既存の棚田や竹林や新しく地形に挿入されたRC壁の間に出来た窪みの一部となっており、そこに設置されるシャワ

ーや水栓などの機器類も、周辺の自然素材が持っている飾らないシンプルな佇まいと同調するものを選択した。

灌漑装置

森に降った雨や雪は時間をかけて棚田に染み出し、かつて田であった時と同様に建物北側の水盤を満たす。屋根に降る雨も石積み外壁を伝って水盤に流れ落ち、石の表面をさまざまな色に変化させ、コケを生じさせる。水盤は北側窓から水平に広がる田園風景の眺めに視覚的な効果を与えるだけでなく、夏場にはその足元から室内に取り込まれる空気を冷却する。水盤をオーバーフローした水は下段の農業用水の一部となる。すべての水の流は棚田の高低差を利用して行われ、既存の灌漑システムの一部となっている。

風の流れ

屋根の勾配と庇の長さは、夏の日射を室内に入れず、冬の暖かな日差しを部屋の奥まで導くように決められている。冬の日中、床面全体に降り注ぐ太陽光はコンクリートスラブに蓄熱され、夜間、室内に放熱される。夏には、北側窓の足元から水盤で冷却された空気が室内に取り込まれ、室内の暖かい空気は屋根の勾配に沿って上昇し、南側の上部の窓から排出される。屋根内部は垂木間が空気層となっており、水下側の給気口から取り入れられた外気が、屋根勾配に沿って上昇し、水上側庇端部のスリットから排出される。

どいかずひで——建築家・土井一秀建築設計事務所主宰/1972年生まれ。1997年、広島大学大学院工学研究科修了。1997-2001年、小川晋一都市建築設計事務所勤務。2002-03年、文化庁芸術家在外研修員としてfoa(ロンドン)勤務。2004年、土井一秀建築設計事務所設立。
主な作品: COURT HOUSE[2007]、GOD BURGER HOUSE[2010]など。



1——南側の棚田から見る[写真:新建築社写真部]

2——水盤越しにリビング・ダイニングを見る[写真:KAZUHIDE DOI ARCHITECTS] | 3——浴室[写真:野村和慎]



3——浴室[写真:野村和慎]

著作権所有者の都合により
掲出できません

